対称群の表現とヤング図形集団の解析学 — 漸近的表現論への序説, 数学の杜 4, 数学書房
の正誤表

洞　彰人

[削] は削除, [加] は加筆を意味する.

ページ	行	誤	正
9	上から 2	(すなわち, ...) [削]	脚注 7) の印 [加]
9	上から 8	脚注 7) の印 [削]	
13	上から 8	両側作用	左右からの作用
13(注)	上から 9, (1.2.12)	$({}^t B^{\overline{\lambda}})$	B^{λ}
13	上から 10–13	ここで, ... 選んでおく. [削]	Fourier 変換 Φ を用いて $A^{\lambda} = (\Phi a)(\lambda)$, $B^{\lambda} = (\Phi\check{b})(\lambda)$ とおくと, $L^1(G) \times L^1(G)$ は $\bigoplus_{\lambda \in \widehat{G}} M(\dim \lambda, \mathbb{C})$ に (左から) 作用する. [加]
13	上から 18	${}^t(\Phi b)(\overline{\lambda})$	$(\Phi\check{b})(\lambda)$
14	上から 3, (1.2.14)	${}^t(\Phi b)(\overline{\lambda})$	$(\Phi\check{b})(\lambda)$
14	上から 4–5	「を用い, ... 」以下次行の式まで [削]	

(注) 13–14 ページの修正への補足: 本文の修正は上記で OK であるが, (使わなくなった) 複素共役表現について補足しておく. $\widehat{G}$ の元として $\lambda = \overline{\lambda}$ のとき, λ に属する既約ユニタリ表現 $(T^{\lambda}, \mathbb{C}^{\dim \lambda})$ をとれば, $(\overline{T^{\lambda}}, \mathbb{C}^{\dim \lambda})$ は $\overline{\lambda}$ に属する既約ユニタリ表現であって, $\overline{T^{\lambda}}$ が T^{λ} と同値であるので, $\overline{T^{\lambda}(x)} = A^{-1} T^{\lambda}(x) A$ $(\forall x \in G)$ となる $A \in GL(\dim \lambda, \mathbb{C})$ が存在する. しかし, 一般にはこの A を単位行列にはとれない. したがって, 「$\lambda = \overline{\lambda}$ なる同値類 λ から代表元 T^{λ} を選んで $\overline{T^{\lambda}} = T^{\overline{\lambda}}$ をみたすようにしておく」ことは, できるとは限らない. ちなみに, G が対称群の場合にはいつも $\overline{\lambda} = \lambda$ であり, しかも λ に属する既約表現は一斉に実行列で表示されるので, $\overline{T^{\lambda}} = T^{\overline{\lambda}}$ をみたすような代表元の選び方は可能である.

ページ	行	誤	正
64	最終行, (3.1.4)	E_{ij}	$A_{\lambda}^{-1} E_{ij} A_{\lambda}$
64	最終行, (3.1.4)		[式の後に] , $A_{\lambda} \in GL(V^{\lambda})$ [加]
65	上から 3	E_{ij}	$A_{\lambda}^{-1} E_{ij} A_{\lambda}$
70	上から 6	$i \neq j$	$i < j$
107(注)	上から 4–7	[削]	定義 4.18 によってあらためて μ のキュムラントをモーメントから定義すれば, 次の補題 4.19 により, (4.2.20) が成り立つ. そうすると反転して (4.2.13) が得られ, 特に (4.2.6) が形式的べき級数の関係式として成り立つ.

(注) 本文では, Laplace 展開によるキュムラントの導入と定義 4.18 による定義とが少々混線している感じなので, このように修正する.

ページ	行	誤	正
148(注)	下から 8		[「とおく.」の後に] (4.4.8) に相当する $\sum_{n=0}^{\infty} q_n(x,y) < \infty$ も仮定する. [加]

(注) 推移確率 $p(x,y)$ に基づいて話を進めるときは, 非再帰性を仮定しており (仮定 4.67), (4.4.8) が成り立った. 一方, $q(x,y)$ に基づいて議論するときは, 非再帰という概念が使えないので, 直接上記の $\sum_{n=0}^{\infty} q_n(x,y) < \infty$ を仮定しておく.

ページ	行	誤	正
181	上から 8–9	$\mathbb{Z}_-^\sharp$	$-\mathbb{N} + \frac{1}{2}$
296	上から 8	$k \leqq m$ と $k > m$	$k \geqq m$ と $k < m$
296	上から 9, (9.1.7)	$k = 1$	$k = 2$
296	上から 9, (9.1.7)		[右辺の頭に] $\exp\Bigl(-\sum_{i=1}^{\infty}(\alpha_i + \beta_i)z\Bigr)$ [加]

作成 2017.9.1, 更新 2017.10.17.